武蔵野日曜集会

視よ此の人！

――ヨハネ伝第18章38節～19章16節――

１９８５年３月３日
小池辰雄

真理とは何ぞ　視よ、この人　我なり　ベートーベン　アイン・メンシュ（人間）　ただ一つのことのために　召団讃歌D2「視よ此の人ぞ！」

【ヨハネ18・38～19・16】

38ピラト言う『真理とは何ぞ』

かく言いて再びユダヤ人の前に出でて言う『我この人に何の罪あるをも見ず。39過越のとき我なんじらに一人の囚人を赦す例あり、されば汝らユダヤ人の王をわが赦さんことを望むか』40彼らまた叫びて『この人ならず、バラバを』と言う、バラバは強盗なり。

1爰にピラト、イエスをとりて鞭つ。2兵卒ども茨にて冠冕をあみ、その首にかむらせ、紫色の上衣をきせ、3御許に進みて言う『ユダヤ人の王やすかれ』而して手掌にて打てり。4ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』5爰にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』6祭司長・下役どもイエスを見て叫びていう『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言う『なんじら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』7ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』8ピラトこの言をききて増々おそれ、9再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処よりぞ』イエス答をなし給わず。10ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか』11イエス答え給う『なんじ上より賜わらずば、我に対して何の権威もなし。この故に我をなんじに付しし者の罪は更に大いなり』12斯においてピラト、イエスを赦さんことを力む。然れどユダヤ人さけびて言う『なんじ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛くなり』13ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石（ヘブル語にてガバタ）という処にて審判の座につく。14この日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、

ユダヤ人に言う『視よ、なんじらの王なり』15かれら叫びていう『除け、除け、十字架につけよ』ピラトいう『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司長ら答う『カイザルの他われらに王なし』16爰にピラト、イエスを十字架に釘くるために彼らに付せり。

●真理とは何ぞ

38ピラト言う『真理とは何ぞ』

かく言いて再びユダヤ人の前に出でて言う『我この人に何の罪あるをも見ず。

ピラトはしきりにこのイエスを、

「罪はない」

と言って、処刑したくないという気持が非常にある。だから、

「私は知らんぞ」

というわけです。ところが、ユダヤ人の方からいうと、そういう者を罰する権利がないから、

「お前がやらなくては」

というわけです。

39過越のとき我なんじらに一人の囚人を赦す例あり、されば汝らユダヤ人の王をわが赦さんことを望むか』

これは過越のひとつの恩典なんです。そのときに誰か罪人を赦すという。御大典のときに恩赦があるのと同じようなこと。

40彼らまた叫びて『この人ならず、バラバを』と言う、バラバは強盗なり。

「バラバ」というのは本当は、「バル・アッバー」なんです。「父の子」という意味です。キリストの使っておられたアラミ語――ヘブライ語の方言――です。だから、「原典」なんていったって、キリストの言葉はみんなアラミ語ですから、ギリシア語に訳したときに時々まちがいがあるわけです。「強盗」といっても、これは政治犯です。暴動を起こした。そして殺人もしたらしい。

1爰にピラト、イエスをとりて鞭つ。

これはわざとやるんだ。そうすると、ユダヤ人が少しは同情するかと、そういう気持もあったらしい。ローマの、

2兵卒ども茨にて冠冕をあみ、

みんなこれは侮辱する、ないがしろにする印なんです。王様だから冠、ただしこれはイバラだ。イバラの冠をかぶせたら、もちろん血が出る。深刻な絵がありますね。

その首にかむらせ、紫色の上衣をきせ、

紫というのは高貴な人が着る色です。皇帝や何かがね。みんな王ということでもって、皮

肉にそういうことをするわけです。

3御許に進みて言う『ユダヤ人の王やすかれ』

「やすかれ」というのは、「シャーローム」という字ではない。むしろ「万歳！」というような気持なんです。これも嘲りです。

而して手掌(てのひら)にて打てり。

もうさんざん侮辱しているわけです。

4ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、

お前たちの方でやれと。

これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』

私はかかわりないぞと。

●視よ、この人

5爰にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』

「視よ、この人」

ということ。「なり」なんていう言葉はもちろんない。これは一格ですから、「この人を」ではない。「視よ、この人だぞ」ということです。

6祭司長・下役どもイエスを見て叫びていう『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言う『なんじら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』

あいかわらず、そう言っている。お前たちがやったらいいだろうと。

7ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、

これはレビ記24章16節に出ている。

「16エホバの名を瀆(けが)す者はかならず誅(ころ)されん。全会衆かならず石をもて之を撃つべし。外国(よそぐに)の人にても自己(おのれ)の国の人にてもエホバの名を瀆すにおいては誅さるべし。」（レビ24・16）

「エホバの名を瀆す」というのは、彼が「自分は神の子だ」と言ったことが「エホバの名を瀆す」ことになる。20節に有名な言葉がある。これは出エジプト記21章や申命記19章にも出てますが、

「20即ち挫(くじき)は挫、目は目、歯は歯をもって償(つぐの)うべし」

と。「生命には生命」と、これが「復讐律」というやつです。だから、人を殺せば必ず殺される。今は非常に殺人がゆるくなってしまっていますが。本当にひどいですよ。こんなのは死刑にしてしまえなんて正直思うようなのがずいぶんあるでしょ。何をしても殺されないということになったら、とんでもない。ユダヤ人はそういうところは非常に厳格です。

だから、これは死罪なんだと。

彼はおのれを神の子となせり』

これが瀆したことになる。

8 **ピラトこの言をききて増々おそれ、**

この「おそれ」という気持はちょっと複雑ですけれども。

9 **再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処よりぞ』**

はっきりしたいわけなんだ。

「どこからやって来たか、天からか地からか？」

なんてなわけです。

イエス答をなし給わず。

黙っておられた。沈黙の答え。このへんはずっとイザヤ書53章を読むと、キリストの気持はよくわかるわけですね。7節、

「7 **彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、屠場にひかるる羔羊の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。**」

（イザヤ53・7）

と。これです。もうイザヤ書53章は、キリストは自分の預言だとはっきり受けとっておられるから。そうしたら、

10 **ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか』**

この世の律法における権威です。ところが、権威問題になると、キリストは次元が違うものだから、

11 **イエス答え給う『なんじ上より賜わらずば、**

神さまから賜らなければ、

我に対して何の権威もなし。この故に我をなんじに付しし者の罪は更に大いなり』

大祭司のカヤパですね。キリストは本当のメシヤ、救い主ですから。油注がれたる者、聖霊の特別な器。これに対して地上の権威なんていうのは問題にならない。相対的にはキリストは結局は、ピラトに、またユダヤの法律によれば大祭司や教法師たちに十字架にかけられたけれども、彼は神さまの命令、神の権威によって自分で自ら十字架にかかったわけです。

「我は自ら捨つる権あり」

と前に書いてある。キリストは天から十二軍を呼び起こしてやっつけることができたんだ。また、いきなり天界へ行くこともできた。しかし、それはみんなバカどもの罪びとたちのために自分は贖罪をしなければならない。これは神さまの命令だから。神の権威において

彼は動いていますからね。

12 **斯においてピラト、イエスを赦さんことを力(つと)む。**

これは何とかして赦さなくてはいかんと。

然れどユダヤ人さけびて言う『なんじ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、

こういうことを言ってやっつけるわけです。これはローマの官憲ですからね、カイザルの命令によっている。だから、赦せば、カイザルの忠臣でなくなるぞと。

凡そおのれを王となす者は

というのは、

「カイザルに並行して別に自分を王とする者はローマの帝政に反するやつだ。王様は二人はいらないわけだ」

と。霊界の王者ということを知らないものだから、そういうことを言う。

「だから、忠臣ではないぞ」

と。それでピラトは窮地におちいるわけだ。

カイザルに叛(そむ)くなり』

と。

「これは政治犯だぞ、イエスこそはローマ帝国の政治犯だ」

と言うわけです。

●我なり

13 **ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石（ヘブル語にてガバタ）という処にて審判の座につく。**14 **この日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。**

「第六時」というのはちょうどお昼頃です。

ピラト、ユダヤ人に言う『視よ、なんじらの王なり』

「お前たちの王だ」

と。ところが、彼らは本当は王と思っていない。王ならば、こんな目にあうはずじゃない。地上の王様を彼らは思っていますから。もう言うことがみんなチグハグになっているわけです。

15 **かれら叫びていう『除け、除け、**

「そんなものは本当は王じゃない」

なんて言ってね。それはそうですよ、地上の王ではない。

十字架につけよ』ピラトいう『われ汝らの王を十字架につくべけんや』

そんなことはできるかと。お前たちの王を十字架につけることになる。彼は王と言ってい

るわけです。

祭司長ら答う『カイザルの他われらに王なし』

さっきの話ですね。だから、王ではないと。

16**爰にピラト、イエスを十字架に釘くるために彼らに付せり。**

と。結局そういうことにる。チグハグの問答で結局そういうことになる。

それで、私たちは今日は、

「視よ、この人！」

というこの一言に集中したいわけです。38節の、

38**「ピラト言う『真理とは何ぞ』」**

と。「真理とは何ぞや」と彼が聞きながら、ピラトが「視よ、この人」と言うのは、ちょうど自分で聞いていて自分で答えているようなものですよ。

「真理とは何ぞや。視よ、この人なり」

ということになる。ピラトは知らないで、本当の答えをしているわけです。彼は「視よ、この人」と言っているときに、もちろん本当の言葉の深い意味で、キリストを知っているわけではないけれども。とにかく、不思議な、何とも言えない人だと。

「真理とは何ぞや？」

と聞かれて、キリストがもし答えようとなさるならば、

「我なり」

ということ。そのほかにない。

「私だ、私が真理だ。私の全生涯を見ろ。それが真理だ」

と。他に説明はいらない。言葉の説明なんかできる始末ではない。死してなお死を征服するひと。十字架の死を死んで、なおそれを征服するひと。復活ですから。これは全く神のひとです。

「神なり」

と言ったってかまわない。キリストは逆に言うと、

「お前たちこそ本当は十字架にかかる連中だよ」

というわけです。

「教法師でも祭司でも、お前たちこそ本当は十字架にかかる連中だ。神に背いている、神を瀆している」

と。そこまでキリストはおっしゃいませんけれども。

「十字架につくお前たちの代わりに、こっちは十字架につくんだ」

と。こういうわけです。

●ベートーベン

私は、３月がくると、二人のひとを思う。ベートーベンと内村鑑三です。これが同じ日の３月26日に天界に往っているんだ。今日は少しベートーベンの話をしたい。

ベートーベンが１８１２年の日記に――彼は１８００年を越えると彼の耳はほとんど聞こえなくなっていた――こういう言葉を書いている。

「お前は

「お前は」というのは自分に対して、

自分のために人であってはならない。他の人たちのためにのみ本当の人であれ。お前にとってはいかなる幸福ももはやない。お前自身の中――お前の芸術、音楽――にだけは幸福がある。」

と。ベートーベンにとっては、我と音楽は一つなんです。

「神さま、自分に打ち勝つところの力をください」

という言葉が続いている。

「ただ他の人たちのために」

という言葉は、ペスタロッチもそのことを言いました。

「我々の生涯は人のためにのみあるんだ」

と。ペスタロッチにとっては、教育が自分自身なんだ。みんな、そのしていること自身が自分自身である。我とそのやっていることとは一つなんだと。そういうことは何も音楽にかぎらない。皆さんがなさっていることはすべてそう。そこに本当の力が入ってくる。そういったところにのみ本当の幸いがある。「幸い」というのは「グリュック」（幸福）というよりもむしろ「ゼーリッヒカイト」（祝福）だ。聖書には「グリュック」という字はほとんど出てこない。みんなこの「ゼーリッヒカイト」という字が出てくる。神さまに祝福されるのが本当の幸いだからね。

ベートーベンの墓で演説したグリルパルツァーという、オーストリアの第一の詩人がある。１８２７年３月29日――これは亡くなって三日目だな――それからもうひとつ、「記念碑の除幕式のときに語った演説」、この二つの演説が名演説です。これは１８２７年11月４日から10日の間に語ったものです。その中の言葉を少しご紹介しておきましょう。

「彼は一人の芸術家であった。彼が存在したのはただこの音楽という芸術によってのみであった。この生命の刺が彼を深く傷つけた。

というのは、耳がつんぼになったことです。

ちょうど難破船の難破者が岸辺にしがみつくように、彼はお前の腕に逃げていった。

おお、汝、善と真と同じような素晴らしい姉妹、悩み苦しみの慰め手、上からやってくるところの芸術、音楽の腕にしがみついたのである。

彼はいっぺん自殺しようと思った。ドナウ河に身を投じようと思った、「ハイリゲンシュタ

ット・テスタメント」というのがある。ハイリゲンシュタットという素晴らしい景色の所で遺言状を書いた。だけれども、この音楽のために思い止まった。

●アイン・メンシュ（人間）

彼は芸術家であった。しかしながら、また人間であった。言葉の最も完全な意味におけるところの人間であった。

ここに「アイン・メンシュ」（人間）という言葉が出てくるので、私は今日、ベートーベンを特に紹介したかった。

「言葉の最も完全な意味で彼はメンシュ（人間）であった」

と。もう寸分のごまかしのない人ですからね。言いたいことははっきり言うし。それから、非常にまた優しい心も持っていた人です。生意気なやつや、上の生意気の者に対しては、帝王といえども絶対に彼は屈しない。けれども、かわいそうな人や、弟子や、弱い人に対しては非常に深い愛情を持っていた。そして、

「自分の音楽はそういう人たちのためなんだ」

というわけです。

正に過度の感受性を彼は持っている。それはかえって、いい加減な感受性を避ける。この世に対しては彼はその深い情感をもって、彼の情感の深さにおいてこの世に対して、彼はあらがっていた。彼は人から避けるときには、彼は彼らに一切を与え、また何もそれのお返しはもらわないで、そして、さっさっと逃げて行った。なんとなれば、彼はいかなる第二の我を発見しなかったからである。

「第二の我」とは、本当に自分を心の底からわかってくれる人。もう一つの意味は、妻のことです。彼は独身でしたから。いろんな女性を彼は愛したですよ、正直。けれども、本当に彼に応えてくれなかった。「ウンシュテルプリッヒェ・ゲリープテ」（不滅の恋人）というのがある。彼の手紙の中にも書いてある。その手紙は封筒の中にいれないで、机の中にあったのが発見された。三人その候補者があるんだけれども。これは大変な手紙です。こんな凄い恋文があるかと思うような。とうとう、誰も彼には応えなかった。こんな素晴らしい人に。それともおっかないのかな、あれ。私の書斎に、おっかないベートーベンの絵が掛かっている。私が大学生のときに、ドイツ製のあのベートーベンの肖像画に私はスッカリ感激してしまって――そのときの五円というのは大変なお金なんだ――それで買った。もうこれで六十年掛かっている。

だから、正にキリストはもっと深い意味で「第二の我」はない。キリストには、「第二の我」はベートーベンよりももっと次元の高い意味で、ないです。

孤独だけれども、彼は死に到るまであらゆる人に対して人間的な心、本当に人らしい心を持っていた。

「メンシュリッヒカイト」（本当の人間性）というのは、言葉の一番深い意味で、非常に大事なことですね。

彼の身内の人たちに対しては父らしい心、また全世界に対しては、自分の持っている一切と生命を全世界に、

ということは、「彼の一切」は音楽だけれどもね。

彼はこのようであった。またこのようにして死んだ。そのようにして彼はあらゆる時代に対して生きるであろう。

全くそのとおりです。

●ただ一つのことのために

ベートーベンの碑がある。その碑は大きな素晴らしい碑かと思ったら、どっこいというわけです。

この記念碑は非常に単純で、

ただ「ベートーベン」と書いてあるだけです。

彼が生きていたときに彼自身がそうであったように、ちっとも見かけは大きくはない。

もし、この碑がいよいよ大きければ大きいほど逆にこの偉大な人の価値との距離は違ってくる。

簡単で小さいのがこの偉大な人にふさわしいんだと。これを大きな記念碑にしてしまったら、本当の大きさとは逆なことになるぞと。

単純にベートーベンとだけ書いてある。」

そして、最後の方に、

霊感のいろいろな瞬間というものは実に少ない。滅多にない。この霊的に貧困なこの時代において。あなた方、ここにいらっしゃる人たちよ、彼は本当に霊感をもって生きた人だったから、それを本当にほめたたえよ。

その次が有名な言葉です。

ただ一つのことを追い求め、ただ一つのことに心を用い、ただ一つのことのために忍びながら、一切のことをこの一つのために投げ捨てながら、この男はこの生涯を貫いて行った。

もちろん、音楽です。

奥さんは彼は持たなかった。子供もいなければ、喜びは滅多になく、楽しみもまた滅多になかった。目が躓かせればそれをくり抜いてしまう、そのようにして余計なものは捨てて、彼はどんどんその目的に向かって進んで行った。」

そして、ベートーベンは最後に何と言ったですか。

「友だちたちよ、歓呼をあげてくれ、喜劇は終ったよ（コメディア・フィニタ・エスト）」

と言った。自分の生涯を、本当は悲劇なんだけれども。ダンテがあの苦難の中を通って書いた詩がやはり、「ラ・コメディア」（喜劇）という詩です。それに「ディビナ」（神聖なる）という「神曲」の「神」の字を付けたのが、ダンテの友人のボッカチオです。ダンテはやっぱり、「喜劇」とだけ言っている。

「ドゥルヒ・ライデン・フロイデ」（苦難を通して歓喜へ）

と、これは手紙の一句です。だから、第九シンフォニーでもって大歓喜をあげているわけだ。

「全世界の人たちよ、あい抱け」

と。ところが、年末にやったって、あいかわらずソ連とアメリカはいつまでたっても喧嘩腰でいる。それは本当の「メンシュ」（人間）の世界を知らないから。イデオロギーの化け物だから。

「本当のメンシュ（人間）でなければダメだ」

と。そのことはベートーベンの生涯そのものが表わしている。彼の第九シンフォニーは凄い祈りですよ。

●召団讃歌D2「視よ此の人ぞ！」

D2「視よ此の人ぞ！」（1985・2・28作　作曲　小池辰雄）

1　ああベートーヴェン！　生涯の
　彼の涙を　誰か知る
「第二の我」は　遂に無し
　この世は仮りの　宿なりし

2　音はひびけど　音の無き
　旅路を独（ひと）り　辿（たど）りつつ
　森と小川を　眼にて聴き
「パストーラル」を　奏（かな）でたり

3　見よ此の人ぞ！　孤独なる
　音の芸術（たくみ）の　巨匠（きょしょう）なり
　なやみ苦しみ　つき貫（ぬ）けて
　世に投ぜしは　「第九（だいく）」なり

4　孤独なれども　その心
　力と愛に　みなぎりて
　あらゆる人の　胸をうつ
　音曲（しらべ）の波は　かぎりなし